

松永遊糸様お誕生日記念SS

(苗陽様が遊糸先輩と『イチヤイチャしたかった』お話)

著… 蜜瀬かえで

「ゼロトップの難しいところは、やっぱりAZが降りてくるとき、前線がガラ空きになるとこね」

テーブルにフォーメーション状に並べられたラムネ菓子をつつきながら、遊糸がちらつと、対面に目を遣ると、

「同感ね」

言いつつ、AZに見立てたラムネ菓子を実際にTZまで後退させる。

「AZ後退のときに、前線の敵まで降りてきては意味がないし、いくらAZが優秀でも前線を抑えつつTZの混戦に突入するのはリスクが高すぎる」

「となると、やっぱり必要なのは」

「AZの後退を支援しつつ、陣形に入り込んだ敵に持ちこたえられるだけの、固いTZね」

遊糸のセリフを途中でさらい、AZからひとりつまんで口に運んだ。おいコラ。

しょうがなく菓子桶から一個取り出し欠員補助。

もう一個取って自分も口に放り込む。

やっぱり頭を使っているとはしくなるのはブドウ糖だ。それを時間が経って泥のようになったコーヒード流し込む。

今夜の宿直は遊糸と後輩の葵だったはずだ。

それがなぜか知らないが、やってきてみればコイツ、伊東苗陽がいた。

「石川さんなら、」

『あおいゝ急にパピイからゝ、「今夜、どうしても相談したいことがあるんだ」なんてゝ。マジっばい？ お呼び出し受けちゃってゝ。うゝん、なんだろう？ うちのパピイ、軍部のお偉いさんだから、あおいゝことわれなくてゝ』

……いやアイツ、全っ然、そんなキャラじゃないだろ。

「パピイ」とか、死んでも言わない。

というか、いま絶賛、気まずい関係のはずでしょ。

その「パピイ」とは。

あとやるならせめて、真顔の棒読みはやめてほしい。

(この鉄面皮め……)

——伊東苗陽。

遊糸が隊長を努める特選隊に並ぶ生徒会直下の特命遊撃隊隊長。

ドまじめな性格で、風紀委員長も兼ねているせいかなにかとからんでくる厄介なやつだ。

まあ、基本大抵、いつも先輩を敬わない葵たちが、なにかしらやらかしてきたときの被害の二次被害なので、それでなんで毎回、私が叱られないといけないの？

私が目指してる「悪い女」は「悪女」であって、風紀委員に叱られてばかりのそこらの「素行の悪い女」じゃない！

「？」

歯ざしりして睨んでも、表情一つ変えずに小首を傾げるので、あーっ、もう、全く。

コイツ相手なら、将棋でも持ってくればよかった、と思いつつ、

「話を戻すわ」

「もとから脱線もしてないけど？」

こっちは散々回想をモノログさせられてんのよ！

アンタが普段からなに考えてるかわかんないせいで！

……まあ、そこらへんを言い出してもしょうがないので大人になることにする。

私は3年。コイツは2年。

つまり、私のほうが大人だ。

大人になろう。

……置いて。

結局始まったのは、互いに隊を指揮する者として共通の興味でもある戦術議論。

話題は、御台場発でいま話題のゼロトップ戦術について。うち、相模女子でも運用が可能か、だけど。

校風もあるけど、

「うちは辛抱できないバチバチ系、多いわよね……」

ヤンキー校とも言われる由縁だ。

後で出番やるからTZで前に出るまで待ってるとか、できるやつはほとんどいないだろう。

いたとして、葵か、もしくは、

「……………」

無言で自分を指してもコイツほどそのあたり信用でき

ないやついないと思うので、スルーしておく、

「B Zの役目も重要だわ」

……確かに。

最初に言った通り。ゼロトップの欠点はA ZがT Zまで後退しているため、最前線がガラ空気になることだ。

そこを食い止められるとしたら、B Zからの援護射撃が効果的だ。

(ゼロトップ発案のセイントツには月岡栴とかいるしなあ

……)

そこらへんに関してはうちの場合、

「練度の高いスナイパーとか、ほしいところね」

「そんな子、うちにはいないばー」

「……言うと思った」
ぺし。

「無言で頬を叩くな！」

コイツ、これがあるからまた面倒くさい。

お堅いくせに、変なタイミングで妙なギャグというか、寒いにもほどがあるダジャレをぶっこんでくるので、ツッコミキャラとしてツッコまざるを得ないのだ。

だれがツッコミキャラだ！

……こういうところだと思うので、改善はしていきたい

所存。

しかし、寒いギャグに毎回つき合ってやってるのになぜ叩かれなきゃならんのだ。

乙女の柔肌だぞ！

なので、まあまとめると。

コイツいるとロクなことにならない。

なので、こう二人きりで一晚とか、本当にサイアクなわけ。

「というか、ゼロトップって、よく考えたらあのメンツだからできる戦術であって、うちでできるのってむしろ変種のゼロB Zじゃない？」

そっちの方が断然向いている気がする。

あとは、最近頭角を出してきた同じく御台場のロネスネスの全包围A Zだけど。

うちも練度は軍隊じみてるけど、根っこがヤンキーか任侠だしねー。到底及ぶ気がしない。

そこらへん、指揮する側の気持ちにもなってほしいものだ。

もういつそ、全ゾーンでの演習訓練の義務づけを全員に強制してみるのもありかもしれない。

そんなことを考えつつ、冷めたコーヒーに口を付けてい

ると、

「じー」

「何よ？」

「……そろそろかしら」

「？」

こちらの顔をじっと見つめていたと思ったら、

(コイツ、顔だけはいいのよねえ……)

壁の時計を見て、勝手に頷いたと思ったら。

「はっぴばーすでーとぅーゆー」

……なんか始まった。

はっぴばーすでーとぅーゆー

はっぴばーすでーとぅーゆー

はっぴばーすでーでいあ、遊糸ー

はっぴばーすでーとぅーゆー

時間はちょうど深夜0時。

本日は7月9日。

私、松永遊糸の誕生日である。

だから、こう。

サプライズ的な感じで祝ってくれるのはうれしい。けど、

「……せめて、その棒読みは何かならなかったの？」

だから、顔だけはいいなあ。小首傾げやがって！

「いや、顔面にクラッカーはやめろ」

危ないでしょ！ 普通に！

寸手のところで止めた。

こういうところで強化リリイの本気を出すな。

「待ってて」

手を下ろした苗陽はそう言って、席を立つと、スタスタと宿直室に備えてある冷蔵庫に向かった。

そして、手に持って戻ってきたのは、

——それ！

「鎌倉のいいとこのケーキじゃない！」

「そうよ。鎌倉のいいとこのケーキよ」

半額のシールは貼ってあるものの、まごうことなき鎌倉のいいとこのケーキだった。

しかも、ワンホール！

半額のシールは貼ってあるけど！

「アンタ、これ、もしかして」

「朝から待って買ってきたわ」

……でしようね。こんないいやつが半額とか。そんな時間まで売れ残ってるなんて。

コイツ、朝からずっとショーケースに張り付いてたな……。

表情を変えないまま、何時間もショーケースのケーキをにらみ続ける苗陽。

……想像に難くない。

しかし店員さんと他のお客さんには悪いが……。

ずっと食べたかったやつなので正直うれしい。

それに、まあ……悔しいけど、そこまでしてくれたっていうのも、うれしくは、ある。

だから、まあ、

「……ありがとう」

「正直は美徳よ」

「……なんでこうも上から目線なのよ」

主賓を敬え。あと先輩も。

せっかく照れながら言ってやったのに！

「――」

「……アンタ、いま笑った？」

気のせいだろうか、いつもの鉄面皮の口元がゆるんだ気がする。

「スン」

「だからそれを口で言うな」

まあいい。それより、ケーキだ。

鎌倉有名店の季節のフルーツケーキが燦然と目の前に輝いている。

しかも、ワンホールだ！

「これ、私たち二人だけで食べちゃっていいの？　というか、食べるわよ」

このタイミングで出してきたということは、そう捉えていいだろう。

どうせ、このあと朝まで宿直当番だ。いま食べたって、寝る前にグラウンドでも走っておけば全然ありだ。

「もちろん」

苗陽も頷く。

そしておもむろに、腰のホルスターから拳銃を抜き出し、いやいやいや。

おかしいでしょ。

「アンタ、なんでそんな物騒なもん持ってきてんのよ！」

「それはもちろん」

こうするためよ。

そう言って、拳銃を突きつけた苗陽は、躊躇うこともなく引き金を引いた。

……ケーキに向かつて。

「アンタ……まさか……」

「これがほんとの」

ワンホール。

「……………」

それがやりたかっただけか……っ！？

あと、食べ物で遊ぶなあ……っ！

「せっかくだから、このままいただきますしやう。お行儀は悪いけれど」

安心して。せっかくのいいときのケーキだもの。火薬の味がしないように、さつき使ったのは殺傷能力はあるけどただの強化エアガンよ。

「逆に怖いわ！」

通りで発砲音がしなしなと思つたわよ！

というか、さらっと殺傷能力とか言うな！

普通にテーブル貫通してんじやない！

「……食べないの？」

「そういうのは、銃を下ろしてから言え！」

パス！

首筋スレスレを鉛玉が通り過ぎた。

コイツ、マジで撃ちやがった……。

重要なことだからもう一回言うけど、マジで撃つたわよ、コイツ？

「……」

不承不承、席に着くと、ようやくその銃をホルスターに戻した苗陽は、今度は代わりにフォークを取り出した。

一本だけ。

自分で持った。

そして、

「あーん」

してきた。

「……割り箸でもないか探してくるわ」

「……」

何で不満なのかは知らないけど、銃に手をかけるな！

……しようがなく、席に戻る。

「あーん」

あいかわらず何考えてるかわからない表情でつきだしてきたフオークの先にあるケーキを私は、

▽食べる

食べない

だからなんなんだ、この選択肢は！

ああっ、もうっ。

食べればいいんでしょ！

食べれば！

▼食べる

~~~~♪

「……何？ 今の音？」

「気にしないで。私の好感度が少し高めにあがっただけだから」

わかりにくいのか、わかりやすいのか、はつきりしてくれ伊東苗陽！

そうやって、黙々と苗陽の差し出してくるケーキを食べ、苗陽は苗陽で（たぶん自分の食べたいところだけを）自ら口に運び。

なんだ、このなぞプレイは……。

よくわからないだけの時間が過ぎていったが、ケーキはとてもおいしかったことだけは伝えておこうと思う。

「――」

あと、よくわかんないけど、コイツはこういうふう to 笑うんだってこともわかった。

……いや。

……やっぱ、普通にわかりづらいわっ、伊東苗陽っ！

受け取ってもらえて、なによりだわ。

そんな私を見ながら、

「遊糸を独占♪」

アンタ、絶対、

それが言いたかっただけでしょーっ！！

\*\*\*

苗陽様によるありがたい解説。

「遊糸先輩を一晚の間だけ独占する、という意味と『唯我独尊』をかけつつ、ガ格とヲ格の格交換によって能動と受動の切り替えまで取り入れた、これはかなりの傑作よ」

\*\*\*